9月21日午前10時頃から柱頭が2つに裂けはじめ，裂け目は既に切れ目の入れてある背面に向わず，腹面を基部に向ってのびて行った (Fig. 1. B)。この頃には果実の基部はかなり軟化しており，背面基部をのぞいて少しの動揺でも萼から容易に離れる状態となっていた，夕方になると外果皮は腹面の裂け目を中心に左右へはがれはじめ，遊離した部分は3個の破片となり，白い内果皮がのぞけるようになった (Fig. 1. C)。

9月22日朝になると外果皮はすっかりはがれ，上下へ反捲して約4個の破片となっていた。外果皮の外面はなめらかで丈夫にできているが，内面は緑色で非常に軟らかい。内果皮は互の結合がゆるめられているが，まだ一つにまとまっている。一つ一つをピンセットで離すと，浮ぶものも沈むものもある。白色不透明で感触はしなやかでサラサラしている。20時までに萼に附着したまゝの2個をのぞいて内果皮はすべて沈下した。早く沈んだものは水がしみ込んで組織がくずれはじめて半透明となり，含まれていた気体が小さな気泡となっているのが見えて来た。

観察は一応こゝで打切ったが，その後内果皮はとけてスライム状となり，一部は気泡のために再び浮上ったものもある。本観察では水を極力平静に保ったために，経過は実際よりおそかったと思われる。現地では池といえども水の動きはかなりあるので，外果皮の裂開から内果皮の分離浮遊までの時間はもっと短かいものと考える。花柄が切離されていることが果の裂開に何か影響があるかを調べるため，果実を水中に入れて花柄の切口から強く吹いてみたが，柱頭部からわずかに気泡が出たほかに何も変化はなかった。背面に切れ目を浅く入れてから同じことをやってみたが，結果は同様だった。本研究は文部省昭和53年度科学研究費補助金 総合研究(A) 234066「尾瀬ヶ原及び周辺地域の総合的調査研究」により正式許可をえて行ったものである。

(国立科学博物館植物研究部)

□上野益三： **博物学史散歩** 八坂書房，1978. 9. 30発行。276頁，索引9頁，82図，口絵写真8頁。4500円。日本生物学の歴史に関心のあるものにとって不可欠の書である「日本博物学史」(平凡社) の著者が，「博物学史散歩」と題し季刊誌「植物と文化」に連載したものをまとめた書物である。場所は長崎，室津，笠岡，京都，大阪，四国路，大垣，釜戸，東京，函館。なかでも博士の永く教鞭をとられた地，京都がもっともくわしい。科学史に興味をもつと科学者に興味をひかれる。そうするとその科学者の活躍した環境を知りたくなり，そこを訪れたくなる。そこを訪れるとさまざまの知識が得られる。しかしそのためには多くの時間と根気と費用がかかる。また豊富な予備知識がなくては効果がうすい。この書を読んで私たちは居ながらにして楽しみつつ，多大の知識を得ることができる。またよい現地への案内書として活用することができる。広く考えれば日本生物学史へ，日本の自然の研究への道案内にもなるであろう。

(木村陽二郎)